

水俣病問題に正面から向き合うことを通じて水俣再生の道を拓く

～激変の1990年代前半・熊本県水俣振興推進室時代を中心に～

元熊本県水俣振興推進室長 森枝敏郎（天草・御所浦町出身）

（元熊本県健康福祉部長）

はじめに

・昨年4月発生 of 熊本地震発生によって様々な影響を受けた水俣病公式確認60年（2016年5月1日）・・・それでも様々なことがあり、何度も水俣に足を運んだ。

・水俣病犠牲者慰霊式が始まるなど、水俣再生への道が拓けた時代（1990年代前半）のことに、水俣病資料館の展示や幾つかの著述等において空白、抹消、矮小化、真実を偽る等の行為がまかり通っている悲しい現実がある。

・このままでは、水俣病犠牲者や水俣再生に尽力した多くの人に申し訳なく思い、水俣病被害地域出身、水俣病被害者支援、水俣再生に尽力した熊本県行政職員OBの3つの面を併せ持つ当事者として「水俣再生の真実」を述べることにしたい。
（全体は膨大な量になり、相当の年月を有するので、ここでは暫定的に、主な出来事を中心に述べることにする。）

・具体的には、熊本県水俣振興推進室の課長補佐・室長として在任していた5年間（1990～1994年度）で大きく変化した水俣の歩みを振り返り、更なる歩みの指針・次世代へのメッセージとして取りまとめた冊子「みなまた～対立からもやい直し」（(株)マインドに委託して制作）の中の公式資料を中心に述べることにしたい。

・具体的には、

①表「環境みなまた推進事業の推移」、資料編の図表

②多面的・総合的な問題であることを我が国で初めてフローチャートにした「水俣という地域社会にとって、水俣病問題とは何か？」

③5年間の水俣社会の変化を表にした「地域社会の変化の状況」

④「水俣再生への展望」の図

を概観しながら、

A 水俣再生と不可分の問題である「水俣病問題とは何か？」

B 何故、いつ頃から「水俣振興」ではなく「水俣再生」という用語を使うようにしたのか

に触れながら、県主導期（1990～1992年度）→地元主導への移行期（1993～1994年度）→地元主導期へ を通じて

C 水俣再生への展望が開けた状況を概説

D その中で、市民相互の融和（市民の相互理解）＝もやい直しを何故、何時ごろから「水俣再生」の基盤的政策としたのか
などについて述べることにしたい。

◎不知火の海に浮かぶ風光明媚な御所浦島で育つ～子どものころからの水俣

私は、1950（昭和25）年4月、不知火海に浮かぶ風光明媚な島・天草郡御所浦村（当時）で生れ育った。父は役場職員、祖父母と母は漁業や農業などをしていた。（若くして亡くなった伯父はチッソ（株）社員だったが、朝鮮の江南工場内での事故が原因とのこと）

水俣病公式確認の翌年、1957（昭和32）年4月、御所浦小学校に入学したが、小学校時代は毎年、春の遠足で御所浦島の最高峰・烏峠に登った。山頂からは360°眺望でき、東方には八代や水俣の工場の煙が見えていた。高度経済成長に向かう時代の中、工場の煙は、私たち御所浦の子どもたちにとっては「近代」の象徴であり憧れだった。

その頃、祖父たち漁師や水俣の親戚から、猫が狂い死にをしたとか、魚が浮いていたとかの話聞くこともあった。水俣に行き、船が港（百間港）に近づくと、漁師たちは、「排水口そばに船（漁船）ば着けとけば虫がつかんばい。」とか「水俣病は日窒（チッソ株）の排水が原因ばい。」と言っていた。何かわからない不安を感じていた。（その頃は、御所浦にも汚染が広がり水俣病被害が発生していたことは知らなかった。）

※役場職員だった父は、「若い時、毛髪水銀調査を受けたら90ppm だった。」と言ったことがある。

濟々髯高校時代、ニュースで知った1968（昭和43）年9月の政府の公式見解には「チッソ（株）とわかっているのに何で今頃か?」「天草出身の園田直さんが大臣になったからか?」と素朴に思ったものだ。

1970（昭和45）年4月からの九州大学時代は高度経済成長の間只中だったが、一株株主運動や白装束の交渉、またストックホルムでの国連人間環境会議等、水俣病を巡るニュースも多く、報道や書籍を通じて川本輝夫さんや浜元二徳さん、坂本しのぶさん、石牟礼道子さん、熊大の原田正純さん、東大の宇井純さん等のことを知った。

大学4年生（1973（昭和48）年）の春には第三水俣病のことが大きく報道され、全国パニックに……。また、同年末にオイルショックもあったが、その頃は（末期ではあるが……）まだ高度経済成長の時代の中であり「希望あふれる時代」だった。

○熊本県入庁時は水俣病闘争が激しい時代

1974（昭和49）年4月、水俣病問題のことが気になりながら熊本県に入庁した。初任の出納室会計課（資金管理班）は県庁舎1階にあったので、水俣病患者団体等の抗議集会や対県交渉等を近くに感じることができた。初めの頃は熊本県職員として水俣病問題にかかわることは避けたかったが、1976（昭和51）年7月の初めての異動先は水俣湾へドロ処理を担当する熊本県水俣湾公害防止事業所（水俣市月の浦）だった。

◎緊迫した時代の中、水俣市民として暮らした水俣湾公害防止事業所時代

（昭和51年7月～昭和55年7月）～沢田一精知事、浮池水俣市長

緊迫した時代の中、水俣湾を目の前に望む事務所（月浦前田）で仕事をしていたが、諸準備を進めて1977（昭和52）年10月に着工できた。

しかし、その後、二次公害を懸念した患者団体等から差し止請求がなされ、しばらく中断したが、1980（昭和55）年4月却下され、同年6月に再開された。

水俣市役所や水俣市漁協、水俣警察署等との接点はあったが、その頃の熊本県職員は水俣病センター相想社には近寄れなかった（近寄らなかった）。

その時代に、上村智子さんの死去や若い患者の会の石川さゆりコンサート等があった。

なお、私、4年間、（出月の親戚の家→湯の児の借上げ宿舎→初野団地に居住）水俣市民として暮らしたが、街中や初野団地で水俣病問題がオープンに語られることはなかった。

◎水俣病被害者に多くのことを学んだ水俣振興推進室時代

（平成2年4月～平成7年3月）～細川護熙知事→福島讓二知事

岡田水俣市長・小松助役（～平成6年2月）→吉井水俣市長（平成6年2月～）

- ・市町村派遣職員第1号としての小国町役場派遣（1985～86年度）から企画課に帰ってきたら、班員の一人が水俣湾埋立地活用懇談会を担当していたので気になっていた。
- ・1989年4月、課内室として設置された水俣振興推進室（和田室長）が水俣湾埋立地及び周辺地域開発整備具体化構想を取りまとめ、7月に公表。

◇一万人コンサートが転機⇒水俣病問題に正面から向き合う方向に（平成2年度）

・私は、1990（平成2）年4月、水俣振興推進室の課長補佐を命じられたが、緊迫感のある時代の中、鎌倉室長（後年、地域振興部長）を筆頭に、また語学力のある職員も加え、スタートしたが、政策力、実践力、そして突破力があつたチームだったと思う。

・赴任挨拶時、地元の有力者からは「水俣病問題はもう良かですけん、地域振興ばお願いします。」と言われることが多かったが、私は、（地域の最大の課題から目をそらすことは）「地域づくりの王道に反する」と思い聞き流すことが多かった。→後年は、反論・説得

・そういう中、その頃までは**熊本県職員は近寄れない・近寄らないゾーン**だった**水俣病センター相思社**や激しいイメージが強かった自主交渉派リーダーの**チッソ水俣病患者連盟委員長**の**川本輝夫**さん宅、**水俣病被害者の会事務所**等、**鎌倉室長**を先頭に初めて訪問した。

・「県職員が！今頃、何しが来っとか！」と痛烈なことを言われた人もいたようだが、私はそういうことはなかった。（私が御所浦出身ということを知っている人がいてやさしく接して頂いたのかもしれない。）

・**内心緊張しながら訪問した相思社スタッフ**は親切であり、何か言われるだろうと覚悟してあいさつに行った**川本輝夫**さんは思いのほかやさしく、私以上に丁寧に頭を下げられた。

・私たちは、**環境創造みなまた推進本部（本部長：松村副知事）**等、県庁内体制を整備しながら、水俣湾埋立地及び明神崎等で整備を進めることになっていた水俣病資料館、環境センター等整備推進に、また、並行して進めることになっていたソフト事業「**環境創造みなまた推進事業**」に着手した。

・その1番目の催しとして、水俣市と協力しながら「**みなまた一万人コンサート**」（於**水俣湾埋立地**）を実施した。水俣湾埋立地での初めての催しということで、小雨の降る中、水俣病犠牲者に黙とうを捧げることから始めたが、昔水俣病闘争の若手リーダーだった**緒方正人**さん達が「**わびもせんで！**」との**抗議のビラ**まき～そのことが大きく報道された。

・また、細川知事の「（水俣湾埋立地で）**歌舞音楽はやらない。**」という発言も大きく報道された。

◇水俣病犠牲者慰霊式を開催することを強く決意

・その頃はまだ犠牲になった方々への慰霊式をしていなかったなので、私たちは**ビラ**の内容に「**やっぱり、そうか。そうだよな！**」と共感し、11月に環境国際会議や世界竹会議等を予定していた**1992年の5月に水俣病犠牲者慰霊式を開催することを決意**するなど、**水俣地域振興の戦略を「水俣病問題に向き合う方向」**に大きく見直すことにした。

・9月には**水俣病裁判で和解勧告**がなされ、**細川知事**や**担当の公害部**は**和解を進める方向**で動き出したが、私たちは、水俣病犠牲者慰霊式や水俣病資料館、水俣湾埋立地整備などの話をするため、まず、多数ある被害者団体・支援団体等のリーダーに会いに行った。

・水俣病第一次訴訟勝訴後の**チッソ(株)**との交渉団長だった水俣病互助会長の**田上義春**さん、ストックホルムの国連人間環境会議で水俣病を世界にアピールした**浜元二徳**さん、中間派と言われていた水俣病平和会長の**石田勝**さん、水俣病第三次訴訟原告団長の**橋口三郎**さん（出水市）、水俣病患者連合会長の**佐々木清人**さん（芦北町）等を訪問した。

・田上さんは、「国や県、チッソもぼってん、一番きつかったつは市役所や市民から差別されたことばい」など。浜元さんは「(何層かの被害者がいて)水俣病は難しか。」「慰霊式ばせんばつまらん。」と言っておられた。

・水俣病患者連盟・水俣病患者連合事務局の高倉史郎さん、相思社の吉永利夫さん、広津敏男さん、遠藤邦夫さん、水俣被害者の会事務局の中山裕二さん等々、更に水俣病互助会事務局の谷洋一さんなどに会いに行った。

・なお、私たちは時折、水俣病被害者、一般市民の双方に知人がいる浮浪雲工房（和紙工房）主宰の金刺潤平さんに状況を聴いていたが、その中で、石牟礼道子さんや水上勉さんとも親交があることを知った。～後年の環境創造みなまた推進事業に反映

⇒そういうことを通じて、私たちは、水俣再生に当たってはまず何よりも1992（平成4）年5月1日（水俣病公式確認の日）に水俣病犠牲者慰霊式を実施すべき・絶対にする！との思いを強くしていった。⇒環境創造みなまた推進事業のプログラムに挿入

◇地域に根差した地域づくりを推進～「寄り会みなまた」など

・また、チッソ（株）に依存した企業城下町だからこそ水俣病被害者を忌避・差別・排除して来た歴史があったことを踏まえ、地域に根差したまちづくりも大切なことと思ひ、まず、市役所内の職員態勢の整備を要請

（小松助役に依頼し、都市計画課にいた吉本哲郎主幹を担当に充てて貰った）。

・そして、私の小国町での「地域資源を活用した住民と行政の協働による地域づくり」経験や吉本氏の綾町の人脈を活かしながら、市民による地域資源マップづくり、「寄り会みなまた」地区集会・全体集会（1991年2月）実施を支援。

→全体集会の場で存在を知ったのが漁師の水俣病患者杉本栄子さん。

・後日、金刺氏に案内して頂き袋茂道の自宅に伺ったら、大変な苦難の話のほか、「水俣ん海に生かされとる」とか「水俣病はのさりばい」と言われたので、頷きながら聴いていた。途中、「あはわかっとな！？」とおっしゃったので、「はい、御所浦ですけん。」と言ったら、「御所浦な！」と急ににこやかな表情になり、以来、旧知の人のように接して頂いた。

◇市民相互の融和（後年の「もやい直し」）を基盤的な政策の一つに

・その頃は、鎌倉、森枝を中心として、各界のリーダーを個別訪問、意見交換していたが、多くの人に会うごとに、水俣病被害者を忌避・差別・排除しようとする傾向が強くなり、また、

被害者団体相互やチッソ(株)の安賃闘争を巡るチッソ(株)の組合の市民を巻き込んだ対立の後遺症が色濃かった。

・金刺氏が「こころの問題が大きい。」と言っていたように、**市民のこころの分断・対立・憎悪が厳しいことを実感し、新たな水俣をつくることの困難さを痛感した。**

・そういうことを踏まえ、「これは地域振興どころではない。まず、こころの問題だ」「振興という言葉は相応しくない。再生が良い。」という思いに到り、「**水俣地域振興**」を「**水俣再生**」に変えるとともに、「水俣病犠牲者に祈る」、「水俣病（問題）を知り学ぶ」と同様に、「**市民の相互理解**」・「**市民相互の融和**」（後年の「もやい直し」）を水俣再生の基盤的な政策にした。

「水俣病問題の解決なくして地域再生はあり得ないこと」の理解促進（平成3年度）

・また、「地域の大きな課題（水俣病問題等）に向き合う中から未来を創っていく」という思いから、1991（平成3）年7月からは**水俣病被害者団体をはじめとする団体別・地区別の意見交換を開始**。その中で、「**水俣病問題の解決なくして地域再生はあり得ない**」ことの理解促進に努めた。

・11月、「**産業、環境及び健康に関する水俣国際会議**」（国連大学と共催）を、県庁内に異論もあったが水俣で開催、水俣病訴訟の**原告側証人**だった**原田正純**熊大医学部助教授にも登壇頂いた。（地元からは、小松聡明助役、吉井正澄市議に登壇して貰った。）

・その時、患者支援者主導による**胎児性患者半永一光**さんの写真展開催が開催されたが、写真展開催を巡る行き違いが県行政をネガティブに扱う報道がされた。（すぐにOKできなかったが、その時点ではまだ、半永一光さんを知らなかったことによる戸惑いが主因）

・会議の終盤には胎児性水俣病患者 **坂本しのぶ**さんの長年の苦しみを訴える発言、水俣病市民会議の**日吉フミ子**さんの「**企業の倫理、行政の倫理、市民の倫理がなっとらんだ**た。」の言葉が会場に響き、**私たちの胸に浸みた。**

・・・私自身は強く共感し、以後、そのことを大きな励みにした。

・その頃、「**苦界浄土**」の著者・**石牟礼道子**さんの水俣の自宅を鎌倉室長（当時）が訪問。私も何度目かに会えたが、「**あたたちは、何か面白かこつばしよらすごたるね。**」とおっしゃった。学生時代に「**苦界浄土**」を読み思っていたとおり、慈悲深く心が広い方だった。

激務の中、水俣病問題に向き合いながら水俣再生を図っていく（平成4年度）

・1992（平成4）年4月にまず、県主導で、水俣病発生後初めて患者と一般市民が会

する「子どもたちにつなぐ水俣を語る市民の集い」を開催することができた。そしていよいよ5月1日には、24年ぶりになる水俣病犠牲者慰霊式を開催することができた。

・その時点では3つの患者団体（水俣病互助会、水俣病患者連盟、水俣病患者連合）が不参加だったためか、マスコミは、慰霊式を望む被害者・家族がいることへの配慮なく、「見切り発車！」との報道をした。（時々会っていた田上義春さんや川本輝夫さん、佐々木義人さんは、「慰霊式は良かばってん、まだ出られんばい。」ということだった。）

・「市民の集い」と「慰霊式」を無事終えることができたので、その後、ブラジルで開催された国連環境会議（地球サミット）に魚住環境公害部長等を派遣（地元の小松助役、吉井市議、松本市議等も）。

・リーフレット作成の際に、初めて「水俣病の教訓」を整理。また、その頃、水俣再生の新たな指針として「水俣再生への構図」を作成し、拠り所とした。

◇水俣再生への大きな歩み

・一方、11月初めには親水護岸、水俣病資料館、熊本県環境センター、竹林園の整備が進み、仮オープンができた。

・11月上旬には、環境創造みなまた‘92～海よふるさとよ甦れ～を実施した。まず、福島譲二知事、岡田市長以下、親水護岸で「海に向かって」を、そして、杉本栄子さんの語りなど、分断された市民のこころとこころを繋ごうとする「こころフェスティバル」、また整備を進めていた竹林園等を舞台に、アジアや欧米からの参加者も交えた世界竹会議&全国竹の大会。レスター・ブラウン米国ワールドウォッチ研究所長が講演した環境国際フォーラム、水俣病発生以来、公式の会議で初めて川本輝夫さんや橋口三郎さんなど4人の患者団体代表に登壇頂いた「産業による環境破壊と地域社会の対応に関する1992水俣国際会議」（国連大学と共催）を開催。水俣市の環境モデル都市づくり宣言で閉めた。

⇒これらの一連の動きは「水俣再生への第一歩」と報道されたが、正直なところ、1990年頃は「できないかもしれない。」と思っていた「水俣再生」への道筋が見えた。「水俣再生」への大きな歩みができたとと思う。

⇒この3年間がなければ、以降の水俣も困難な状況が続いていたのではないと思う。

なお、その頃の私たちは、通常の帰宅時間が20～21時、7月から24時頃。9月～11月半ばの休日なしの約70日は、連日27時（翌朝の3時）頃の帰宅という激務だったので、苦勞が報われ、涙滲む思いがした。

水俣病被害者・支援者、一般市民、行政等の協働～対話の日常化へ（平成5年度）

・1993（平成5）年4月から水俣振興推進室長を務めることになったが、今後の2年間で①水俣病の**和解**ができる地元の**社会状況づくり**、そして②動き出した**水俣再生**を軌道に乗せることを私たち県水俣振興推進室の**ミッション（使命）**にした。

・まず、2年後という短い時間で**実施主体を地元に移行していく**ために、小国町役場時代（1985～1986年度）の住民と地元行政の協働、地域の主体性向上による地元主導の地域づくりの推進の経験（⇒町民参画によるまちづくりシナリオづくり、若手町民と役場職員の合同のワーキングチームである町民プランニングシステム等）を活かし、様々なテーマで水俣病被害者、支援者、一般市民、行政等が**企画段階から協働して取り組むワーキングチーム**を設置し、「対話の日常化」を図ることに注力した。

・そのためまず、1993年4月に初めて水俣市職員＝森安功企画課長、吉本哲郎水俣振興推進室次長を連れて相思社訪問したが、これを契機に相思社と水俣市役所の交流が徐々に広がっていった。

・4月には、それまで、明水園以外には忌避的な状況に置かれていた胎児性水俣病患者等の福祉を考える一環として、初めて「**水俣の福祉を考える市民の集い**」をしたが、まだ関係者や当事者などに、方向性・認識のギャップがあった。

・その後、水俣病犠牲者慰霊式（5月1日、3団体は依然として不参加）、6月に「**水俣地域の振興・再生とチッソの存続を願う市民大会**」等、地元中心で開催されるようになった。

7月には患者本人が語る「**水俣病を語る市民講座**」の開設を提案・支援したが、これは現在の**水俣病資料館の語り部**につながっている。

※その頃、資料「**水俣という地域社会にとって、水俣病問題とは何か？**」を作成

・11月には**環境ふれあいインみなまた'93**（・海に向かって ・こころフェスティバル・環境再生フォーラム 等）を開催したが、私たちの働きかけに応じた**相思社が初参加**し「**ユージン・スミス写真展**」を出展した。

・また、水俣再生を本格化させていくためには、多くの市民が気にしている**チッソ株**が慰霊式以外の場で謝罪することが不可欠と思い、本社幹部に粘り強く何度も要請した。・・・結果、ようやく理解を得ることが出来、環境再生フォーラム当日は、**水俣本部事務部長の「お詫び」の言葉**がシーンとした会場一杯に響いた。

この二つの出来事により、市民相互の融和が本格化するかもしれないと思った。

・私は、時々、田上義春さんや川本輝夫さんなど、主な患者団体のリーダーとも会っていたが、「慰霊式は良かばってん、今はまだ出られんばい。裁判があつとるけん知事はできんどけん、せめて水俣市長には謝罪して貰わんとでけんばい。」と言われていた。

・特に、田上義春さんや川本輝夫さんは、水俣病一次訴訟や自主交渉等を巡り、水俣市長・市行政から差別・排除されたとの思いが強かった。

・そういう話を受け、私は、「水俣再生を本格的に進める上においては、3団体の慰霊式への参加が必要であり、そのためには、1994（平成6）年5月1日での水俣市長の謝罪が不可欠である」ことを、内々に水俣市幹部に伝え、「謝罪」を強く要請していた。

・1993（平成5）年末頃になると、私は、小国町役場時代の地域づくりの経験から、「市民の相互理解＝市民相互の融和」という用語を地元の言葉・方言を使って言いたいと市役所幹部に言ったら、数日後、緒方正人さんから「もやい直し」という提案があったと返って来た。

・私は漁村育ちでもあり、その言葉が良いと思い、県・市とも以降は「もやい直し」という用語も使うように決めた。

※1994（平成6）年初めの市長選挙で吉井正澄氏が当選、2月就任

「もやい直し」が広がる→和解ができる環境づくりが進展（平成6年度）

・なお、その頃、水俣の新しい動きを全国の人に知ってもらいたいと思い、月刊誌「文藝春秋」に働きかけた結果、「新・水俣ものがたり」（平成6年4～6月号）が連載された。

・4月には「水俣湾及び水俣湾埋立地に関する市民討論集会（市民の集い）」を実施したが、水俣病発生の地という思いの強い水俣病被害者等の意見とレクレーション機能の充実を主張する一部の一般市民が対立的な雰囲気・・・。浜元二徳さんは、途中、「埋立地ば何と思とつか！！」と声を上げて泣き出した。

・私たちは、「水俣病原点の地である」という思いが強く、またそういう土地であるからこそ、造園業者に整備させるだけでは意味がないと思っていたので、①「やさしいまちづくり」を踏まえ、バリアフリーに配慮するほか、②親水緑地を祈りのゾーンとしても位置づける、③市民参画の森づくりを進める（その一環として、市役所から提案のあった実生の森を入れる）、④水俣病患者・障がい者の園芸療法見本園を設置するなど水俣湾埋立地整備計画を見直した。

・さて、注目の1994（平成6）年5月1日の水俣病犠牲者慰霊式には、（内々に市長の謝罪が伝えてあったので、不参加だった3団体が初めて参加、就任間もない吉井水俣市長が謝罪ともやい直しの宣言（一般市民への呼びかけ）をした。

・その日を契機として、吉井市長の動きも活発になり、「もやい直し」（市民相互の融和）に弾みがつき、より一層、市民全体へ広がった。～期待していたことではあったが、「もやい直し」（市民相互の融和）推進のためには、市長自らの動きの影響が大きいことを実感。（水俣再生の基盤ができた時期の岡田市長は健康問題があり自らは活発な動きができず、多くは小松助役が代行）

・その後、初めて県・水俣市・相思社の三者協働で「水俣病&環境学習のリーフレット」（水俣病資料館、水俣病歴史考証館を同列に掲載）を作成したが、水俣病闘争が激しい時代を知る人から「これは驚きだ」と言われた。残念だったのは、県政記者室にも情報提供したが、一行も報道されなかったこと。☹

・この頃、更に患者団体を含めた市民協働で「水俣湾クリーンフィッシング大会」、「水俣病と水俣の明日を語り合う夕べ」を、また、熊本市内で「今伝えたい水俣展」等を開催。

・その頃、石牟礼道子さん、緒方正人さん等が設立した本願の会から、水俣湾埋立地での火のまつり、石像（魂石）設置の話を受けた。深い話だと思い、判例を調べて石像設置が適法であることを確認したり、親水緑地の管理を担当していた港湾課を説得するなど、できるだけの支援をすることとした。⇒石像設置についての協定書締結は1995年2月

11月の環境ふれあいインみなまた'94の「水俣の再生を考える市民の集い」では相思社の吉永利夫さんに水俣病被害者の会との共同司会を要請。父がチッソ社員で患者だった開田理巳子さんの話は多くの人の胸に響いた。

・夕暮れ時の水俣湾埋立地一面に竹あかりが灯る「火のまつり」・・・浜元二徳さん、杉本栄子さん、緒方正人さんなど本願の会が主導し、寄る会みなまたが協力するカタチでスタート。魚たちに向けた杉本栄子さんの語りや竹灯籠など、大変、幻想的だった。私は福島知事の傍らにいて、経緯等を説明しながら一緒に見ている。知事は頷いておられた。

・平成7年の1月には、水俣市とも連絡を取りながら主な患者団体事務局長に呼びかけ懇談会をしたが、距離感があつた患者団体の事務局長相互がざっくばらんに話す雰囲気になった。私はその状況を見て、「政府決断があれば和解が実現する」ことを確信した。

水俣振興推進室の最後の仕事として、「水俣再生への展望」図を作成するとともに、以後の水俣再生の指針・再生へのメッセージとして冊子「みなまた〜対立からもやい直しへ〜」を（株）マインドに委託して発行した。（500部印刷、市町村等に配布）

⇒この5年間に「水俣社会」は激変し、分断・対立から市民相互の融和（「もやい直し」）の状況が見られるようになったが、唯一人、5年間を総括する立場にあった者として、次の3つの要素があったからだと確信している。

①水俣病被害者等の人間力

・田上義春さんや川本輝夫さん、佐々木清人さんや石田勝さん、橋口三郎さん等々の患者団体のリーダー、また、浜元二徳さんや杉本栄子さん・雄さん、緒方正人さんなどの水俣病被害者、更に、高倉史郎さんや中山裕二さん、吉永利夫さんなどの支援者、石牟礼道子夫妻の「忌避・抑圧されて来たのにも関わらず、人を許容する力」＝「人間力」があった。

②水俣病被害者に配慮し、環境をキーワードとした水俣づくりを理解し得る人たちの存在

・水俣市行政が、岡田市長や小松助役を中心として、「環境モデル都市」づくりを進める方向に転換しつつあったほか、吉井正澄市議などの数名の市議、紫藤千海さんや西英夫さん、金橋均さん、永野ユミさん、坂田信介さん、宮島正英さんなどの市民有志の存在があり、徐々につながった。

・その中で、一般市民・水俣病被害者の双方に知人・友人がいた金刺潤平さんがいたことも大きい。→金刺氏には、1993～'94年度、県環境創造みなまた委員会委員を委嘱

③熊本県水俣振興推進室の体制が強力であった

・1989年4月に設置された県水俣振興推進室に、1990年4月、県職員随一のアクティブな鎌倉室長と子どもの頃から水俣を知り、小国町でのまちづくり経験等を有していた森枝ほか配置され、強力な体制になり、積極的に水俣社会に入って行ったこと。

◎最高裁判決、水俣病50年、そして環境・福祉モデル都市を目指して

～環境生活部時代（平成16年4月～平成19年3月）～潮谷義子知事

・その後も毎年、個人としても水俣病犠牲者慰霊式に参列。また、金刺潤平さんなどと連絡しながら、水俣東京展を見学したしていたが、水俣病50年が近づき、また最高裁判決を控えた2004（平成16）年4月、環境生活部次長を命じられた。

・5月1日、潮谷義子知事と共に水俣病犠牲者慰霊式に参列した後、乙女塚に案内した。

・平成16年8月には水俣湾親水緑地で、私たち県職員も加勢した石牟礼道子さん作の新

作能「水俣」が無事上演された。

～私たち県職員有志は県庁加勢人として応援・立ち会い

・その頃、「公害原論」で知った宇井純さんと水俣湾を望む場所で会う機会があり、水俣再生の歩みを話したが、頷いておられた。

・坂本しのぶさんたちが通う「ほたるの家」を初めて訪問したのもその頃だ。

・緊張して迎えた10月15日に関西訴訟最高裁判決があり、国・熊本県の責任が確定したが、私個人としては従前から「国・県も責任あり」と思っていたのでほっとした面もある。

・判決後、潮谷義子知事が原告団等に謝罪したが、私は、それまでの水俣での経験を踏まえ、県としての主体性を確保しながら国への提案・要請書作成に着手した。

・政治や社会の現実に限界・葛藤を感じながらも判決後一月半で「今後の水俣病対策について」として取りまとめ、11月29日には、県を代表して国に提出、協議を開始した。

・途中、難儀した局面もあったが、健康調査を除き概ね県の意向が反映され、2005（平成17）年4月7日、国の「今後の水俣病対策について」としてまとめられた。

・最高裁判決後初めての水俣病犠牲者慰霊式（2005（平成17）年5月1日）では、緊迫の雰囲気の中、潮谷知事がせつせつと謝罪の言葉を述べた。

・平成17年度になると新保健手帳がスタートしたが、秋には不知火患者会から訴訟が提起された。その頃から内々に検討を進めていた和解と同様の補償・救済策について平成18年5月30日に国に要請したが、それがのちの特措法につながったと思っている。

※特措法は、私がこだわっていた「水俣病被害者」は採用されたが、残念ながら、また時限的なものになった。

・水俣病公式確認50年の2006（平成18）年5月1日、それに先立つ2月、経済学者の宇沢弘文さん等とともに熊本日日新聞の紙上座談会に出席したことは、良き思い出だ。

☆宇井純さんも宇沢さんも吉井さんの「もやい直し」発言が水俣再生の道を拓いたという大きな誤解をされていたので、当時の資料を提供し説明したら理解された。

平成18年度の後半は、環境省水俣病発生地域環境福祉推進室長補佐を兼務し、毎週、東京通いをしたが、国・県の予算編成の中で「胎児性水俣病患者等の地域生活支援事業」等を創設し、また私自身も委員を務めながら「健康調査分析検討調査」を実施した。

※私は、遅ればせながら、国が中心になって体系的・広範な健康調査を実施しないと水俣病補償救済問題に区切りはつかないと思っていたが、結局、実施に至らず、水俣病補償救済問題は現在も続いている。

・なお、「政治解決の際に何故非該当になったのか疑問」と思っていた**緒方正実**さんの水俣病認定については安堵したものだ。

・2007（平成19）年1月には、水俣病50年の「みなまた曼荼羅話会・創世記を迎えた水俣」に潮谷知事を先導、緒方正人さんや石牟礼道子さんの話を懐かしく聴いたが、久し振りに心に響いた。

・なお、県民等が学びやすくなるよう**県民交流館パレア**に水俣病学習コーナーを開設した。
※何故か、現在は縮小されている。

◎福祉モデル都市への協働～健康福祉部時代

（平成19年4月～平成23年3月）～潮谷義子知事→蒲島郁夫知事

・2008（平成20）年4月、胎児性患者の人等が待ち望んだ「ほっとはうす」が落成した。

・県職員としての最後の仕事として、環境生活部と協働し「今後の水俣病発生地域の保健・医療・福祉の推進に関する基本的な考え方」を3月末に取りまとめることができた。

水俣への感謝、そして水俣再生への思い～地域共生社会づくりへ

・その後も時折り水俣に足を運んでおり、平成26年11月29日には、熊本市内で「ほっとはうす」利用の胎児性水俣病患者 **金子雄二**さん、施設長の**加藤タケ子**さんに登壇頂き、水俣病問題も踏まえた「地域共生社会づくりを考える全国フォーラム」を開催した。

・水俣病60年・・・残念ながらこれまでに、田上義春さんや川本輝夫さん、杉本栄子さん、原田正純さんなど多くの方が亡くなった。

・一方で、近年の水俣は、残念ながら、（水俣病互助会の人が）「もやい直しと言うけど、市役所は誰も来ん。」という声があるように、「水俣病問題に正面から向き合うことなく環境モデル都市と言っている。」と言わざるを得ない。

・水俣病資料館の新たな展示についても、①チッソ（株）や国・県の責任、また、水俣市行政と市民の責任など、水俣病問題のポイントをぼかしており、②「もやい直しコー

ナー」は、前記のような大きな変化があった1990～1994年度の3つの要素（P10の①～③）を無視し、「吉井という一人の偉大な人間が道を拓いた」という歴史の偽装をしている。これは、水俣病犠牲者・水俣病の歴史を冒とくし、国民を偽るものだ。

・水俣は、まだ、多くの困難を有している中、「水俣再生の原点」に立ち、水俣病問題に正面から向き合っていけば、きっと「環境と人間をキーワードとする地域共生社会」（＝「小さな国際環境・福祉都市」）が実現し、多くの困難を抱えている人間社会・人類の道標になり得るのではないか。そう信じて、これからも水俣と共に歩んで参りたい。